岐阜協立大学論集 54 巻 1 号（2020 年）

地域スポーツ事業に参画したスポーツ専攻学生の学び分析

－大垣市レクリエーション協会との連携事業への参画に着目して－

古田　康生（岐阜協立大学経営学部）
小原　慶祐（岐阜協立大学大学院経営学研究科）
原田　理人（岐阜協立大学経営学部）
渡部　昌史（新見公立大学健康科学部）

キーワード：地域スポーツ事業，学生の学び，連携，事業参画，コード法

Ⅰ　序論

1 研究背景（支えるスポーツの現状）

2017 年、公益財団法人全国大学体育連合は、会員大学・短期大学で協力が得られた会員校の学生 5,861 名を対象に「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」を実施し、現在の学生が日常的にどの程度スポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参加しているかについての調査結果を報告した[1)]。

支えるスポーツに関する項目では、「過去 1 年間に経験したスポーツ・ボランティアの状況」と「やってみたいスポーツ・ボランティア」、そして「スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由」について報告している。

それによると、42.1%の学生が、過去 1 年間に何らかのスポーツ・ボランティア経験を有しており、その活動内容は、「スポーツの審判」が 18.9%、「スポーツの指導」が 15.6%、「大会・イベントの運営や世話」が 14.7%、「団体・クラブの運営や世話」が 8.3%であった。また、「やってみたいスポーツ・ボランティア」では、「大会・イベントの運営や世話が、28.0%と最も多いが、「したいとは思わない」と回答する学生が 42.8%あった。そして、「スポーツ・ボランティアができない理由」では、情報が入りにくい（20.9%）、時間がない（37.4%）、会場が遠い（14.8%）、経費がかかる（14.8%）、一緒に行く人がいない（9.3%）とあるが、最も多い回答は、「したいと思わない」が 34.9%と報告されている。

また、笹川スポーツ財団[8)] では、20 歳代から 60 歳代の成人 10,000 名を対象にスポーツ・ボランティア経験をインターネット調査した結果、過去 1 年間のスポーツ・ボランティア経験者は 5.3%、加えて、過去 1 年間はしていないが、それ以前にスポーツ・ボランティアを経験した者 9.4%で、合計 14.7%の成人が、これまでに何らかのスポーツ・ボランティアを経験し、その活動内容は、「地域のスポーツ大会・イベントの運営や世話」が 39.3%と最も多く、次いで、「日常的なスポーツの指導」が 29.3%、と報告している。

これら調査結果は、現在の学生を含む日本の成人がスポーツ・ボランティアに対する意識の実態が把握できる貴重な資料である。

2 ボランティア活動での学生の学び

前記の全国大学体育連合[1)] や笹川スポーツ財団[8)]、國木による「大学生のボランティア経験とボランテ

ィア感」[3] などのスポーツ・ボランティアに関する調査は、学生や青少年のボランティア参加実態を把握するには貴重な資料であるが、種々の活動に参加することで得られた「学び」については明らかにするまでには至っていない。前記の通り、スポーツ・ボランティアをしたいと思わないと 34.9%の学生が回答[1] しているが、その背景には、活動参加の意義や参加することで高められる専門知識や技能など、参加することで得られる「学び」について学生が理解できるよう知らされていない可能性がある。また、その根拠となる「学び」の客観的な資料は決して多くはない。したがって、学生をスポーツ・ボランティアに導くのであれば、その参加誘因となる学生の成長を示す客観的な根拠が必要であろう。

これまで、学生がスポーツ・ボランティアに参加することによる意識変容に関する研究報告は極めて少ない。音成[7] は、ボランティア活動を行うことで自尊感情を高める傾向があることを報告している。また豊田と金森[9] は、「スポーツ・ボランティアを経験する意味は何か」を明らかにするため、インタビュー形式により質的検討を試み、ボランティアに参加した学生の態度及び意識がいくつかの変容パターンを示すことを報告している。すなわち、学生はボランティア経験を通して消極的態度から、自己変容を経て、ボランティアに対する態度が変化するという共通の心理的プロセスを辿るが、その後一つは、強制的参加から新たな挑戦に至る積極的変化、もう一方は、強制参加から、受動的理解に至る消極的参加が認められたとしている。特に、ボランティア従事から新たな挑戦に至るプロセスでは、活動に伴う自己変容のみならず、活動で獲得した積極性を自己の生活世界へ凡化したとも報告している。加えて、スポーツ・ボランティア活動に参加した個人では価値観の拡大と新たな価値観の掘り起しが期待できるため『発掘型体験学習』と称して教育モデルの構築を提言している。

スポーツ・ボランティアではないが、ボランティア活動に参加した学生の学びでは、看護学生を対象に、活動参加で得られる学びに関する報告がいくつかある。看護学生を対象に、被災地での継続的な活動を通しての学び調査では、「心と体の健康や人とのつながりに対する看護学生の思いが変化し、その意味を再認識した」と報告されている[5]。また、看護学生のアロマセラピーを用いた活動では、「チームの一員としての責任感を自覚し協働作業の意識向上に繋がった」とある[2]。その他に、中学生の保健授業に補助者として参加した学生の学びを活動参加後に記述したレポートを資料に分析したところ、思春期の中学生の特徴を理解する、子どもへの教育指導を考える、そして看護学生の学習委意欲を高めるなどの効果が認められたと報告されている[6]。

以上のように、学生が種々のボランティア活動に関わることは多様な学びが期待できる報告がある。しかし、これまでの研究報告の多くは、一過性の関与であり、事前の研修やプログラム作成、当日の運営や参加者との活動、ふりかえりといった一連の過程を経ていないケースが多い。また、主催団体や地域住民と連携してプログラムを運営する事例は極めて少ない。

そもそも、スポーツ・ボランティアとは、「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支えたりする人」[4] と定義されており、地域スポーツ事業において地域団体と連携してのボランティア活動に関わる学生の学びを客観的に分析する意義は大きく、活動参加を希望しない学生に興味関心を抱かせる「参加誘引要因」を見出せる可能性があると考えられる。

3 研究目的

本研究の目的は、地域レクリエーション協会と連携して実施した高齢者対象の健康スポーツ・レクリエーション事業に参画したスポーツ専攻学生を対象として、参画学生がその経験を通してどのような学びを

得たかを検討することである。

4 用語の定義

(1) 参加と参画の違い

「参加」は、あるものごとの一員として加わる意味で幅広く使われるが、既にあるものに加わるというニュアンスがある。一方、「参画」には、事業や政策などの計画段階から関わるニュアンスがある。そのため、ただ加わるだけ、一時的に出席した時などには用いず、計画段階から主体的にかかわっていた場合にのみ使われる[10)]。

本研究で調査対象となった学生は、「健康スポレクひろば」に一過性の参加ではなく、事前研修でのプログラム案の修正及び詳細の決定、役割分担、活動の指導シミュレーション、事業運営当日においては、活動の指導や地域レクリエーション協会に所属するスタッフとの連携、そして事業後には事業評価と次回の実施に向けての課題の発表などについて自主的主体的に関与したと考え、本研究では参画という言葉を用いる。

(2) 地域スポーツ・レクリエーション事業

本研究で学生が参画したボランティア活動は、公益財団法人日本レクリエーション協会と特定非営利活動法人岐阜県レクリエーション協会が主催し、特定非営利法人大垣市レクリエーション協会（以下、大垣市協会とする）が主管するスポーツ・レクリエーション事業である「健康スポレクひろば」である。これは、地域に居住する 60 歳から 80 歳のシニア者(以下、参加者とする)を対象としたスポーツ・レクリエーション事業である。

(3) 地域スポーツ・レクリエーション事業に参画しての学び

本研究では、学生の自発的で主体的に参画した事業によって得られた「気づき」、「疑問」、「思い」を『学び』とした。

Ⅱ　研究方法

1 調査対象者

A 大学経営学部スポーツ経営学科に在籍し、スポーツ・レクリエーションを専攻する学生 30 名（以下、参画学生とする）であった。学年別、性別の人数を表 1 に示した。

表 1　学年別の参画学生の数

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	計
男子学生	3	7	3	10	23
女子学生	3	0	3	1	7
計	6	7	6	11	30

単位:人数

2 調査期間

2019 年度に大垣市協会が実施した「健康スポレク広場」は全 12 回あり、そのうち、A 大学経営学部スポーツ・レクリエーション研究室と連携したのは 10 月から 12 月に 6 回であり、参画学生への質問紙調査も

それに合わせて実施した。

3 データ収集方法

研究デザインは、質的記述的調査研究である。参画学生を対象に、活動内容に関する無記名自由記述式調査を行った。「健康スポレクひろば」終了直後に自由意思に基づき記述時間を設け、質問紙はその場で回収した。調査用紙は、A4 用紙一枚とし、質問項目は『今回の健康スポレクひろばでの「気づき」や「学び」、「疑問」、「意見」を自由に記述してください』とした。記述時間は、おおむね 15 分程度であった。

4 データの分析方法

調査対象学生より得られた分析対象データである自由記述文の分析方法は、意味のある文章を一つのまとまりとしてコード化（切片化）して、カテゴリ化を行い、サブカテゴリ、カテゴリの順で分類した。データ分析結果の信頼性を確保するため、質的研究の経験を有する複数の研究者が検討を重ね、データを分析した。相違点は、協議を重ねて決定した。

5 倫理的配慮

研究協力を得た調査対象学生の 30 名に対して、研究趣旨と実施の意義、調査方法、研究結果の公表においては、個人情報保護を遵守し、個人が特定されない旨を説明した。また、調査協力は自由であり、不参加や途中での中止であっても、不利益は生じない、と説明し同意を得たのちに回答させた。

なお、本研究は、岐阜協立大学研究推進委員会規則、『岐阜協立大学における研究者の行動規範』を遵守して実施した。

6 地域スポーツ・レクリエーション事業の概要

2019 年度に学生が参画した地域スポーツ・レクリエーション事業の一覧を表 2 に示した。このうち、本研究の調査対象となったのは、「健康スポレクひろば」の 6 回分である。

表 2　2019 年度学生が関わった地域スポーツ・レクリエーション事業一覧

NO.	月日	事業名	主催・主管
1	4 月 29 日	ごうどスポーツ・レクリエーションフェスティバル	神戸町・岐阜県レクリエーション協会
2	6 月 9 日	第 2 回　OGAKI スポーツフェスティバル(全国一斉あそびの日)	大垣市・大垣市教育委員会
3	10 月 9 日	*1　健康スポレクひろば　Ⅱ期 4 回目	大垣市レクリエーション協会
4	10 月 26 日	岐阜県レクリエーションフェスティバル「マグダーツ大会」	岐阜県・岐阜県レクリエーション協会
5	10 月 30 日	*2　健康スポレクひろば　Ⅱ期 5 回目	大垣市レクリエーション協会
6	11 月 4 日	ぎふ清流レクリエーションフェスティバル 2019	岐阜県・岐阜県レクリエーション協会
7	11 月 13 日	*3　健康スポレクひろば　Ⅱ期 6 回目	大垣市レクリエーション協会
8	11 月 30 日	クラブゆうすぽーつ	大垣市レクリエーション協会
9	12 月 18 日	*4　健康スポレクひろば　Ⅲ期 3 回目	大垣市レクリエーション協会
10	12 月 25 日	*5　健康スポレクひろば　Ⅲ期 4 回目	大垣市レクリエーション協会
11	1 月 29 日	*6　健康スポレクひろば　Ⅲ期 6 回目	大垣市レクリエーション協会

注）本研究で調査対象となった参画学生は、上記の*1 から*6 の 2 から 3 回の事業に関わった

「健康スポレクひろば」とは、A 大学経営学部に在籍する参画学生が、大垣市協会から依頼を受け、連携を図り実施した地域スポーツ・レクリエーション事業の一つである。

参画学生は、この事業においてプログラムの企画・運営はもちろん、環境準備、受付、記録など種々の役割を大垣市協会に属する日本レクリエーション協会公認指導者資格を有する協会スタッフ（以下、協会スタッフとする）と協働して遂行した。

プログラムの概要を図 1 に、プログラム例（2019 年 12 月 18 日分）を図 2 に示した。

『健康スポレクひろば』の概要

1.受付及び血圧測定

参加者は、受付にて日常でのタクスポ（後述）の実践を記録したファイルを提出する。

血圧を測定し、自悪的な体調を確認する。

2.ラジオ体操およびウォーキング・ジョギング

ラジオ体操は、全ての回で実施され、動作ポイントを確認してから「ラジオ体操第一」のみ行う。

3.ソフスポ（ソフトスポーツ）

スポーツ・レクリエーション活動を中心に、参加者相互でのペアワークや体操、チームで無理のない活動をする。

調査対象となった回では、ふうせんバレーボール、ディスコン、日レクボール、ソフトディスクを使用したフライングディスクなどのニュースポーツを参加者は、参画学生および協会スタッフと一緒に活動する。

4.タクスポ

自宅でできる体操で、主に下肢や体幹、上肢の大筋群を効果的で安全に負荷できるトレーニングをする。

自宅での実践を促すため、実施方法のポイントを確認しながら 2～3 種目実施する。

5.わかち合いの時間：おしゃべりタイム（参加者相互とスタッフとの情報交換）

今回の振り返りや自宅での実践などについてスタッフを交えて参加者相互で情報交換する。

終了後の体調確認と次回の案内などを確認する。

図 1　健康スポレクひろばプログラムの概要

プログラムにおいて、参画学生の主な役割は、次の通りである。

ラジオ体操では、参加者の前でのデモンストレーションや動作ポイントの解説をした。ウォーキングやジョギングでは適切なフォームのポイントを説明し、参加者とペアになっての一緒にウォーキングをしながら会話するなどの活動をした。ソフスポ（ソフトスポーツ：参加者に過度な負荷にならないスポーツ活動）では、各回で実施されるニュースポーツのルール確認やチーム編成などの運営を担い、参加者と一緒にプレイした。タクスポ（自宅でできる体操及び自重負荷による軽トレーニング）では、参加者に分かりやすいようゆっくりとした動作でのデモンストレーションなどを務めた。受付や血圧測定、活動の記録についても行い、これらの役割は、協会スタッフと一緒に役割を務め、適宜助言を受けながら行った。

なお、参画学生は事前にプログラム内容を理解し、シュミレーションを行い、必要に応じて活動内容や運営方法に変更を加え、個々人で役割を確認して臨んだ。

今回の参加者の主体が 70 歳以上の高齢者であった。しかし、参画学生の多くが高齢者に対する身体的機能や精神面などを専門的に学んでいないため対象者理解に乏しかった。そのため安全確保を考慮しスポーツ・レクリエーションを専門とする教員がプログラム案を作成し、参画学生に説明して理解させ、その上

で改善点や役割などを協議して活動内容を確定した。

NPO 法人大垣市レクリエーション協会『健康スポレクひろば』Ⅲ期 第 3 回
実施日時:2019 年 12 月 18 日(水曜日)9:0～11:30(スタッフ実働 8:30～12:00 まで)
運営スタッフ:岐阜協立大学学生・大垣市レクリエーション協会　会場:大垣市青年の家・講堂
今回のひろばのねらい:①スポレクで健康づくり(**ふうせんバレーボール**)

時刻	活動内容	支援内容・役割分担	準備物
8:30	集合	講堂集合⇒スタッフ打ち合わせ:内容と各自役割確認	スケジュール用紙
	会場準備	講堂の準備　①ふうせん準備(通常風船 8 個・競技用 2 個)	通常風船、ふうせんバレーボール用
		会場準備　②全体プログラム(ホワイトボードに示す)	ホワイトボード・ペン
		③のぼり:2 本・ 講堂内、 入口	のぼり 2 本
		④パイプ椅子の配置(舞台下から 20 脚)・長机(4)	
		CD　ラジオ体操用(電源入れて流して確認)	CD デッキ・音源
		受付(講堂)　名簿、血圧計、ファイル、記録用紙、配布物の設置	
9:00	受付	①受付スタンバイ:長机・椅子、 記録写真撮影	受付表
	血圧測定	受付表・スポレクファイル回収、(血圧測定、体調)	血圧計
		名札の作成(養生テープに名前を書いて貼る)	養生テープ・マジック
	体調確認	②会場声掛け:挨拶、着席誘導(荷物は椅子の下)**上着はしばらく着たまま**	
		講堂内の体感温度(気温)を共有する	
9:30	開会の辞	司会 →”ひろば”参加のメリットの確認 ＝ 学生と一緒に活動できる、学生自己紹介	
		1 自己紹介で脳トレーニング(名前の記憶)	
		2 座位と立位での「グーパー」を活用した体操	
		3 ラジオ体操(大きな動作の“ねらい”説明)	
		4 再度 up の目的→おしゃべり歩行 → しりとり歩行 → ゆっくりジョグ	
		○水分補給・体調把握の声かけ(全員で)	
10:05	ソフスポ 1	1 ペアワーク ペア・チームで行う意義の説明、**使用部位の筋肉名称を説明**	
		1)じゃんけんお回り , 2)じゃんけん貯金で脳トレーニング	
		2 風船ペア(打ち合う、移動)風船チーム(名前で打ち合う)参加者と学生あるいは協会スタッフ	
		ふうせんバレーボールの特長の説明	
		休憩(水分補給・呼吸を整える)	
10:30	ソフスポ 2	○**ふうせんバレーボール**(参加者と学生、スタッフ混成チームでゲーム)	
		・チーム編成 ・ルールの確認(今回は、4～5 点ゲーム制)	
		休憩(水分補給・呼吸を整える、体調掌握)	
11:00	タクスポ 説明	○**ファイルを手元**にタクスポの説明 **使用部位の筋肉名称を説明**	
		(1)下肢強化体操:1)スロー風力マッスルアップ 左右 5 回×2 回 2)立位:スプリットスクワット 4 カウント×2 回	
		(2)大腿部ストレッチ(2 人組) 5 カウント×3 回 最後一回は壁を使用	
		○大垣市民体操	
11:20	わかち合い	○長机の周りに参加者と学生・スタッフが座ってお茶タイム(情報交換)	
11:30	終了解散	○司会:次回、12/25 お待ちしております(次回も学生がスタッフ参加します)	

図 2 健康スポレクひろばプログラム事例(12/18)

また、毎回の活動前に参加者の血圧測定値と自覚的体調を直接的に尋ねて確認し、活動中にトラブルが生じないよう配慮した。

Ⅲ　研究結果

地域スポーツ・レクリエーション事業の一つである「健康スポレクひろば」に参画した学生の「学び」を分析した結果を表３と表４に示した。

参画学生の「学び」のコード総数は、199 であった。サブカテゴリは、６つに分類され、参画結果、対象者理解（内面性）、対象者理解（身体機能）、プログラム、自己課題、事業企画であった。カテゴリは、３つに分類され、参画意義、対象者理解、プログラムであった。それぞれについて以下、カテゴリは【　】、サブカテゴリは〈　〉、参画学生の具体的な記述内容は「　」で示す。

表３　スポーツ・レクリエーション事業に参画した学生の学び(1)【参加の意義】

カテゴリ	サブカテゴリ	学びの記述内容	件数
参画の意義	参加結果	素直に楽しい、息を合わせて楽しめた、一緒の楽しめた、高齢者と関われて楽しかった、心が温かくなった、楽しかったと言われ嬉しい、達成感を感じた、嬉しい	25
		貴重な体験ができた（日常的に高齢者とは関われない）、大変な経験、貴重な経験、成長が実感できた、色々なことに気づける、学べる、自己課題が見つかる	16
		負けていられない、刺激になる	6
		参加者の方が合わせてくれた、助けられた、学生が話かけられる場面が多い	5
		授業では学べないことが学べる、他の教科に活かせる	2
		また参加したいが、都合もある	2
		異年齢交流は戸惑う、経験不足	3
	自己課題	学生の自発的行動が重要である	2
		雑談力に世間一般的な情報が必要である、世間話ができる	2
		話しかけるようにする、話しかけられなかった、話しかけられた、コミュニケーションが図る、目を見て話す、笑顔で話す、名前で呼ぶ	16
		礼儀は大切	1
		全体に気を配る、周囲への配慮、即座にサポートできる態勢、スタッフ間連携	4

1【参画意義】

このカテゴリは、〈参加結果〉と〈自己課題〉の２つのサブカテゴリにより構成された。すなわち、参画学生が事業に参画したことで感じた〈参加結果〉及び今後の大学での学びにて解決しなければならない〈自己課題〉の発見という項目で構成されると解釈できるため【参画意義】と命名した。

(1)〈参加結果〉

参画学生の多くが参加者と一緒に活動することに肯定的な感想を記述していた。それは、ニュースポーツなどの活動にて「一緒のチームでの活動が素直に楽しい」、「息を合わせて楽しめた」、「一緒にプレイを

楽しめた」と感じ、「高齢者と関われて楽しかった」、「心が温かくなった」、「参加者に楽しかったと言われ嬉しい」など参加者と一緒にプレイすることで有意義な活動ができていると理解できる記述が認められた。また、「プログラムに参画して貢献できて達成感を感じた」や「嬉しい」という記述もあった。

学生の多くは「普段は高齢者とは関われないため貴重な体験ができた」や「大変有意義な経験」、「貴重な経験の機会」とこの機会を貴重だと感じている学生が多くあった。また、「参画で役割を果たすことで成長が実感できた」や事業参画を通して「色々なことに気づける」、「学べる」、「授業では学べないことが学べる」、「他の教科にも活かせるスキルが学べる」、「自己課題が見つかる」といった実践的な学びの実感や貴重な機会になると感じている様子がうかがえる。

加えて、参画学生には、参加者の活動に取り組む姿に「負けていられない」や「刺激になる」と記し、自らの取り組みを省みる学生もあった。

一方、種々の活動において「参加者の方が合わせてくれた」、「助けられた」といった感謝の言葉や、「学生の方が話かけられる場面が多い」という参画学生の力不足を指摘する意見もあった。

反面、少数ではあるが参画学生には「また参加したいが、授業や部活動、アルバイトといった都合もある」、「異年齢交流は戸惑う」、「経験不足で何をして良いか分からない」といった参画を継続する上での課題や戸惑う感想の記述も認められた。

⑵〈自己課題〉

参画学生の中には、具体的な自己課題の気づきを記述する者も認められた。最も多かった〈自己課題〉とは、参加者とコミュニケーションを図り方であった。つまり、「プログラム全体において自発的行動が重要である」をはじめ「参加者と会話をするためには“雑談力”など世間一般的な情報が必要であり、それに欠けている」、「地域に関する世間話ができない」など参加者との会話が続かないことを自己課題に挙げる学生が複数学生で認められた。会話の切っ掛けを自己課題に挙げる学生も多く、「参加者に自分から話しかけるようにする」や「今回は話しかけられなかった」、「参加者側から話しかけられた」、「学生自らコミュニケーションを図る」などの課題が記述されていた。加えて、会話をする際に求められる具体的な留意点として「目を見て話す」、「笑顔で話す」、「名前で呼ぶ」が挙げられ、会話においては「礼儀が大切」と指摘する学生もあった。

次に、プログラム運営に関しての自己課題では、「全体に気を配る」、「周囲のスタッフや環境構成への配慮」、「即座にサポートできる態勢」、「スタッフ間の連携」といった項目が挙げられた。プログラムを実際に運営するにあたり、リーダーとして活動を指導・進行する立場とそれをサポートする立場になり、相互において何をしなければならないか等に気づけたことが理解できる記述が認められた。

2【対象者理解】

このカテゴリは、〈対象者理解：内面性〉と〈対象者理解：身体機能〉の２つのサブカテゴリにより構成された。すなわち、健康スポレクひろばに参加した高齢者の取り組み方や言動などを通して理解した内面性と、プログラムにて一緒に活動することで感じ、理解した高齢者の身体機能が具体的に記述されていたため、このカテゴリを【対象者理解】と命名した。

⑴〈対象者理解　内面性〉

参画学生は、プログラムに参加した高齢者の参加態度を「参加者自身が楽しめている」や活動を通して「笑顔が徐々に増えていく」または「笑顔が多い」、「できなくても楽しんでいる」、「楽しんでいる」と捉

え、活動そのものに対して「意欲的」、「積極的」、「すごく前向き」と感じている記述が認められた。また、「参加者は体を動かしたい欲求が高い」、「適度に休憩を促さないといけない」、「諦めず頑張る」といったプログラム進行での留意点についても気づけていた。一緒に活動した学生に対して「参加者が親切」であり「面白い」、学生を「応援してくれる」、「仲良くしてくれる」、「ミスを責めない」、「私のことを覚えていてくれる」など学生が、参加者に受容され、内面的な優しさを感じたという記述が多数あった。また、学生は一緒にプレイするニュースポーツにて参加者が「作戦等考えることを楽しんでいる」や「賢い」というニュースポーツ活動において考える行動を観て対象者理解が深められている記述も認められた。

今回の調査で得た〈対象者理解　内面性〉の記述では、活動を楽しむ姿と前向きな取り組み方といった顕在化された事象だけでなく、高齢者を対象としたプログラムを運営する上での留意点と配慮の記述も認められた。また、参加者と参画学生との関係において参加者からのアプローチが多く、学生が受け身であったと理解できる記述が多数認められた。なお、参加者に関する記述内容は、全てが肯定的記述であり、否定的な内容は認められなかった。

(2)〈対象者理解　身体機能〉

参加者の身体機能に関する記述では、「元気で活動量が多い」や「柔軟性が高い」という活動の量的視点の記述と、「活き活きしている」や「学生よりも高齢者の方が活発である」、「動きが想像以上にできる」、「パワフル」、といった主観的で質的な記述が認められた。一方、「足腰の衰えがある」と「ジャンプは難しい」という加齢に伴う身体機能の変化の記述もあった。そのため、高齢者の身体機能の「維持には継続的な活動の機会が大切」という気づきに至る記述があった。

3【プログラム】

このカテゴリは、〈運営プログラム〉と〈事業企画〉の2つのサブカテゴリにより構成された。すなわち、参画学生が運営するプログラムの活動内容と方法に関する気づきと事業企画そのものに関しての項目であった。そのため、このカテゴリを【プログラム】と命名した。

(1)〈運営プログラム〉

〈運営プログラム〉に関する記述では、第1に、「リズム的な活動があっても良い」と「音楽を活用したプログラム」という音楽活用の工夫、「体力レベルが高い人用の活動も準備する」、「レベル分け」といった全ての参加者が身体機能レベルに合った活動ができる工夫といった活動内容の工夫についての気づきがあった。第2は、指導学生の「声が聞こえているかの確認」、「説明はデモンストレーションで分かりやすく」、「説明では言葉を選ばなければならない（言葉遣い）」、「説明ができるようにしておく」といった参加者の前で実際に指導する場面で留意する指導スキルに関する事項が挙げられた。第3は、「スポーツで分かち合うのに年齢は関係ない」、「年齢差を感じない」、「スポーツで交流できる」、「スポーツの在り方の見直す機会（多世代交流できる）」、「誰でもできる活動は誰でも楽しめる」といったスポーツ・レクリエーションの本質的価値に関する記述が認められた。

第4は、「ふうせんバレーボールは能力差が出ない」、「相互の掛け声で盛り上げる」、「全員が楽しめる特性がある」、「一緒に喜び合える」、「奥深い」、「プレイに参加できる」、「生きがいにもなる」等であった、これは2019年度「健康スポレクひろば」で実際に活動したニュースポーツのふうせんバレーボール、ディスコン、日レクボールなどの特性が言語化された記述と理解できる。

さらに、万が一の怪我の発生に備えて「緊急時の対策を準備しておく」も僅かであるが認められた。

(2)〈事業企画〉

〈事業企画〉では、「このような地域活動の機会を増やすべきだ」というスポーツ活動による地域活性化に関連する記述があった。今回は、自由記述回答としたため質問項目に“次回の事業への参画を希望するか”は設けなかった。しかし、「次の機会も参加したい」との記述が多数認められた。

表 4　スポーツ・レクリエーション事業に参画した学生の学び(2)【対象者理解】【プログラム】

対象者理解	対象者理解 内面性	参加者自身が楽しめている、笑顔が徐々に増えていく、笑顔が多い、できなくても楽しんでいる、参加者は体を動かしたい欲求が高い、適度に休憩を促さないといけない、楽しんでいる、意欲的、積極的、すごく前向き、諦めず頑張る、参加者が親切、面白い、応援してくれる、仲良くしてくれる、ミスを責めない、私のことを覚えていてくれる、作戦等考えることを楽しんでいる、賢い	52
	対象者理解 身体機能	足腰の衰えがある、元気で活動量が多い、活き活きしている、学生よりも高齢者の方が活発である、ジャンプは難しい、維持には継続的な活動の機会が大切、動きが想像以上にできる、パワフル、柔軟性が高い	18
プログラム	運営プログラム	リズム的な活動があっても良い、音楽を活用したプログラム、体力レベルが高い人用の活動も準備する、レベル分け	4
		声が聞こえているかの確認、説明はデモンストレーションで分かりやすく、説明では言葉を選ばなければならない(言葉遣い)、説明ができるようにしておく	4
		運動能力に応じたプログラムでなければならない	1
		スポーツで分かち合うのに年齢は関係ない、年齢差を感じない、スポーツで交流できる、スポーツの在り方の見直す機会(多世代交流できる)、誰でもできる活動は誰でも楽しめる、スポーツは掛け声で楽しくなる	12
		ふうせんバレーボールは能力差が出ない、相互の掛け声で盛り上げる、全員が楽しめる特性がある、一緒に喜び合える、奥深い、プレイに参加できる、生きがいにもなる	11
		緊急時の対応を準備しておく	1
	事業企画	このような地域活動の機会を増やすべきだ	1
		次の機会も参加したい	11
			199

Ⅳ　考察

1【参画の意義】

本研究で得られた参画学生の最も多い記述内容は、〈参画結果〉と〈自己課題〉の【参画の意義】であった(42.21%)。今回の調査結果では、豊田と金森[9]が報告した「自己変容」に関する記述は少なく、カテゴリを形成するには至らなかった。その理由として調査対象となった参画学生の全て生が自発的参画の学生であり、強制的参加ではなかったことから、大きな意識変容を記述する学生が認められなかったのではないかと推測される。つまり、自発的で主体的な参画であるからこそ「自発的行動が大切」や「コミュニケー

ションを図る」、「礼儀」といった〈自己課題〉に関する気づきを記述する学生が多く認められたとも考えられる。また、参加者と一緒に活動することで、「素直に楽しい」や「達成感を感じた」、「嬉しい」、「貴重な経験ができた」、「授業で学べないことが学べた」といった参画に肯定的な記述が多く認めたれた。

したがって、本研究では参画学生の多くが参画に対する抵抗感がなく、参画前から活動に対する意識が高かったため、肯定的な〈参加結果〉が得られ、また具体的な〈自己課題〉の気づきにつながったと考えられる。ただし、事前研修や参画前の客観的な意識調査はできていないため、活動を通しての意識変容の検討は次回の研究課題となった。

2【対象者理解】

このカテゴリでは、参加者の内面性を意味する発言や行動を具体的な記述が認められた。「笑顔が徐々に増える」や「体を動かしたい欲求が高い」、「楽しんでいる」、活動に「積極的」、ニュースポーツ活動で誰かが失敗しても「ミスを責めない」、学生に対して「親切にしてくれる」、参加者だけでなく学生にも声援を送り「応援してくれる」など参加者の肯定的な言動を記述する内容が認められた。

また、身体機能の理解を記述する内容も認められた。それは、参加者には「足腰の衰えがある」とある一方、「元気で活動的」や「活き活きしている」、「想像以上に動ける」などの記述があり、高齢者の身体機能的特徴を表す項目が認められた。

参画学生は、スポーツ経営学を専攻する学生であり、体育学やスポーツ健康学を専攻する学生とは異なり、高齢者の身体的・心理的な加齢による変化特性は大学での授業科目で学んでいない。しかし、一緒に活動することで、参加者の身体機能特性や心理的な内面性が理解できている記述が認められ、対象者理解を深める一つの方法となると考えられた。

3【プログラム】

プログラム内容やその運営、指導に関しての記述が認められた。プログラム内容に関しては、「音楽・リズムを活用した内容があってもよい」や参加者の「体力レベルに合わせて、別々のプログラムを用意すべき」、「参加者の運動能力に合わせた内容」などの記述が認められ、プログラムの課題に気づけていると理解できる項目であった。具体的な指導方法では、参加者にリーダー学生の説明の「声が聞こえているか確認する」やゲームや体操の「説明はデモンストレーションで分かりやすくする」、また、説明をする学生は「言葉遣いに注意して」、説明する際は失礼が無いよう「言葉を選ばなければならない」とあった。また、いつでも人前で説明できるよう「準備しておかなければならない」ともあった。

そして、「掛け声でスポーツは楽しくなる」といったスポーツの特性や、今回のプログラムで実践したふうせんバレーボールなどニュースポーツの特性に関する記述もあった。

今回の調査結果では、学生がプログラムを運営することで、プログラム内容や進行方法、指導法の課題に気づいている項目が認められた。

これらのことから、学生はスポーツ・ボランティア活動に主体的に関わることで、有意義な時間が過ごすことができ、自分に足りない〈自己課題〉の発見につながる。また、一緒に活動することで〈対象者理解〉を実践的に深めることができる利点もある。加えて、活動プログラムの運営や指導の実践を通して〈プログラム〉の専門的な知識・技能としての運営法や指導法が実践的に身につけられる。これらの事項は【参画の意義】と合わせて、非参画学生に十分に訴求する魅力の一つになり得るのではないかと考えられた。

Ⅴ　結論

本研究では、スポーツ専攻学生が、高齢者を対象とした地域スポーツ・レクリエーション事業に参画し、その活動を通しての学びを自記式質問紙法にて調査し、分析した。その結果、次のことが明らかとなった。

1. 学びの気づき項目数総数は、199 件であった。
2. 学びをカテゴリ分類した結果、6 つのサブカテゴリと 3 つのカテゴリに分けられた。
3. サブカテゴリは、〈参加結果〉と〈自己課題〉、〈対象者理解（内面性）〉と「対象者理解（身体機能）」、〈プログラム〉と〈事業企画〉であった。
4. カテゴリは、【参加の意義】、【対象者理解】、【プログラム】の 3 つであった。
5. 参画学生の学びを分析した結果、全てが肯定的記述内容であり活動に参画する魅力の一つの【参画の意義】を見出すことができた。

参考文献

1）公益財団法人全国大学体育連合(2017)大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告,
http://daitairen.or.jp/2013/wpcontent/uploads/09d0f647e187255d563c1eb191e052f6.pdf(最終アクセス 2020 年 7 月 8 日)

2）小濱優子, 中村滋子(2017)看護学生のアロマセラピーを用いたボランティア活動の学び―病院での患者と家族への関わりを通して―, 川崎市立看護短期大学紀要第 21 巻第 1 号 p.39-47

3）國木孝治(2016)大学生のボランティア経験とボランティア観, 至る誠館大学研究紀要第 7 号, p.109-116

4）文部科学省(2016)平成 26 年度 文部科学省『スポーツにおけるボランティア活動活性化のための調査研究（スポーツにおけるボランティア活動を実施する個人に関する調査研究）』報告書
http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2014_report_21_2.pdf(最終アクセス 2020 年 7 月 10 日)

5）中川杏奈, 森田千純, 山田実佳(2015)継続した被災地でのボランティア活動が現地の人々や看護学生に与える影響, 日本看護学会論文集(看護教育)第 45 号, p.71-74

6）岡田摩理, 中垣紀子(2016)中学生の保健の授業に教育の補助者として参加した看護学生の教育効果, 日本小児看護学会誌第 25 巻第 2 号, p.61-67

7）音成陽子(2018)大学生のスポーツ・ボランティアのあり方, 流通科学研究第 18 巻第 1 号, p.25-38

8）笹川スポーツ財団（2018）スポーツボランティアに関する調査（2018 速報版）
http://www.ssf.or.jp/report/category6/tabid/1631/Default.aspx（最終アクセス 2020 年 7 月 10 日）

9）豊田則成, 金森雅夫(2007)スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？―びわ湖大学駅伝にボランティア参加した学生の「語り」から, びわこスポーツ成蹊大学研究紀要第 4 号, p.9-18

10）世の中のギモンを解決するメディア『スッキリ』何が違うの？「参加」と「参画」の違い, https://gimon-sukkiri.jp/participation/（最終アクセス 2020 年 7 月 10 日）

付記

本研究は、岐阜協立大学 2019 年度「学長裁量経費事業」の教育改革助成金を受けて実施した。また、学生が参画したスポーツ・レクリエーション事業を主管する特定非営利活動法人大垣市レクリエーション協

会の理事長である日比千穂先生（岐阜協立大学非常勤講師）と協会スタッフの皆様には、プログラム運営において多くのご指導を頂いたことをここに記し、感謝申し上げます。